

小樽雪あかりの路実行委員会（北海道小樽市）

ほのかな明かりが創り出す 幻想空間とおもてなしの心

小樽雪あかりの路実行委員会
副実行委員長
米花 正浩



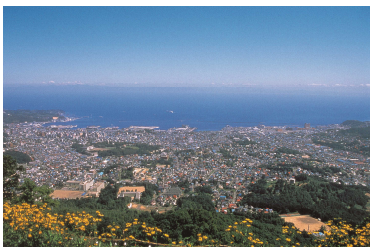
1. 小樽市の概要

■豊かな自然に囲まれた坂のまち

小樽市は、北海道西海岸のほぼ中央に位置する、海と山に囲まれた人口約13万3000人のまちです。東西に長く、総じて坂や斜面の多い地形となっています。まちを縁取る海岸線の中央には小樽港、東側には石狩湾新港や工業団地があり、西側には国定公園に指定される勇壮な海岸が連なります。

産業は、観光関連を中心に、機械・金属、木工、ガラス、水産・食品加工などが盛んです。また、日本海に面することから、ロシアや中国など対岸諸国との貿易が行われ、国内外から訪れる大型クルーズ客船の寄港地にもなっています。

気候は海洋性で寒暖の差が小さく、春は花見、夏はゴルフやマリナレジャー、秋は紅葉、冬はスキーと、四季を通じて自然を満喫できます。



天狗山山頂から眺める市街地

■国内有数の観光都市に

小樽市は、明治から昭和初期にかけて、天然の良港とうたわれる小樽港を中心に、商工港湾都市として発展しました。明治13年に道内初の鉄道が手宮～札幌間に開通し、小樽港は、北海道における、本州やサハリン（樺太）との荷役・物資の陸揚げ港になりました。これに伴い、銀行や船舶会社、商社などが次々と進出し、世界の商況を反映し、ウォール街に例えられるほどの活気にあふれました。また、明治から大正期はにしん漁の全盛期で、千石場所といわれた祝津では、大漁に沸き、親方（網元）

たちが富を築いていきました。

第二次世界大戦後、ニシンの不漁や樺太の喪失、経済改革などにより、北海道経済の中心は札幌へ移動していき、小樽は斜陽の都市と称され、まちには、繁栄をしのばせる小樽運河や歴史的建造物、街並みが残されました。

しかし、小樽の歴史的遺産が見直されていく契機となったのは、昭和40年代後半から50年代にかけて起こった「運河論争」。運河保存をめぐるまちを二分したこの論争が、市民にまちの財産を再認識させ、「まちづくり」を意識させるきっかけになりました。運河の整備が進み、古い倉庫を利用した観光施設などが開設されると、マスコミが小樽のまちへ注目し、全国から多くの観光客が小樽に足を運ぶようになりました。さらには、繁栄の中で培われた職人技術、新鮮な海産物、豊かな自然環境なども観光資源として見直されていきます。また、ガラスやオルゴール、スイーツなどの専門店が観光スポットに集積し、小樽観光の魅力を大きく広げていきました。

今や小樽は、年間700万人もの人々が国内外から訪れる国内有数の観光都市に成長し、先人たちが築いた財産を生かし、活力あふれるまちへと歩みを進めています。



多くの観光客でにぎわう小樽運河

2. 活動の内容、始まりの経緯

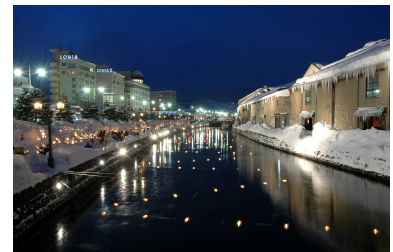
■小樽雪あかりの路とは

「小樽雪あかりの路」は、「雪」と「あかり」をテーマにしたイベントで、平成11年2月から始まり、次回で第

13回目を迎えます。開催期間は、毎年、2月上旬の10日間。期間中延べ50万人もの人々が訪れます。

メイン会場の小樽運河では、水面に約400個のガラスの浮き玉キャンドルを浮かべるとともに、散策路にろうそくをともしたスノーキャンドルや雪のオブジェなどを並べ、幻想的な世界を創出しています。また、もう一つのメイン会場である手宮線跡地では、ボランティアスタッフが製作したオブジェやスノーキャンドル、ワックスボウルなどを設置し、ほのかな明かりで来場者を温かく包み込みます。

雪あかりが市内全域に広がりつつあり、約13万本ものろうそくの灯が全市でともります。第12回においては、45か所で学校や町会などによる「あかりの路会場」が行われました。



幻想的な雰囲気の小樽運河

■冬の閑散期対策として誕生

「小樽雪あかりの路」は、冬の閑散期対策から生まれました。多くの観光客が訪れる小樽ですが、冬期は入込みが大きく減少します。小樽観光にとって、閑散期の集客と通過型から宿泊型への移行が大きな課題であり、いわゆる「冬」と「夜」が弱点となっています。

この解決に向け、官民が一体となり検討した結果、小樽らしい新たなイベントを行うことに決定しました。何を実施するか議論を重ねる中、「運河にキャンドルを浮かべたら、きれいじゃないか」という発言から、「雪」に「あかり」をともすアイデアが誕生しました。さらには、まち

の資源活用から、まち発展の礎となった小樽運河と手宮線跡地をメイン会場にし、市内いたるところに明かりをとすというフレームが確立しました。また、イメージから、小樽ゆかりの作家・伊藤整の詩集「雪明かりの路」を名称のモチーフに使用しました。こうして「小樽雪あかりの路」が誕生したのです。

■実行委員会とボランティア

主催する実行委員会は、地元企業や商店街などの有志を中心に、観光関連業界、ボランティア団体、関係機関などで構成されています。事務局は小樽市が担当し、まちを挙げての取組となっています。

また、ほかにも市民はもとより全国から、そして遠くは韓国や中国などの外国からもボランティアがスタッフとして集い、第12回においては、期間中延べ2860人が参加しました。



実行委員会の様子

■活動のコンセプト

活動におけるコンセプトは、「手づくり」、「地域資源の活用」、「おもてなしの心」の3つです。

「手づくり」のこだわりは、同時期に開催される「さっぽろ雪まつり」との差異を明確にするものです。厳寒の中、ボランティアスタッフがスノーキャンドルやオブジェの製作、ろうそくの点火、消火のすべてを手作業で行い、イベントを支えます。

また「地域資源の活用」では、「身近にある雪」「運河や手宮線などの歴史的遺産」のほか、「メイド・イン・小樽」を掲げたグッズづくりにもつながっています。使用するろうそくは、雪あかりのオリジナル。道内唯一の市内ろうそく工場が、厳寒と風雪に耐えられるよう試行錯誤の上で製作しました。ガラスの浮き玉キャンドルに使う部品についても、ガラス製漁業用浮き玉や金属製ろうそく

台、おもりなど、市内の職人たちが工夫し作りしました。

「おもてなしの心」は、ボランティアスタッフと来場者とのふれあいを意味します。「寒いですね」「どこからいらしたのですか」「きれいですね」「ありがとうございます」というようなお互いの声掛け、ふれあいこそがこのイベントそのものです。来場者へのおもてなしとなるばかりか、スタッフの凍てつく心を温めます。

3. 活動における工夫、効果

公式ホームページを開設し、イベントの内容を告知するとともに、イベントの核であるボランティアスタッフの活動を紹介し、「小樽雪あかりの路」の魅力を市内外にPRしています。また、ポストカードを作成し、無料頒布することにより、次回開催の告知を行うほか、イメージ向上を図っています。さらには、オブジェコンテスト、フォトコンテストを開催し、入選作品をポストカードの図案などに採用すること、さらには観光客を対象にイベントの裏側を体験してもらう、ボランティアスタッフによるバックヤードツアーを実施することにより、イベントのサポーターを潜在的に育成しています。

このような活動の結果、回を重ねるごとに、全国メディアへの露出も多くなり、小樽の新たな魅力にもなっています。また、閑散期だった冬季の観光客が増え、宿泊施設の稼働率アップ、市内飲食店や物販店への回遊など、市内経済の活性化に寄与しています。また、商店街などが「喰いだおれラリー」やコンサートなどの独自企画を行うようになり、経済波及効果ばかりではなく、商店街組織の活性化にも貢献しています。

しかし、最大の効果は、市民同士の交流を促したことや、わがまちを見つめ直し「郷土愛」をはぐくむきっかけになったことではないでしょうか。企業、町会、個人がそれぞれの場所でオブジェを作ることにより、職員同士、住民同士、家族間で交流する機会となっています。さらには、マスコミに取り上げられたり、さまざまな賞を受賞したりし、「小樽雪あかりの路」が客観的に高い評価を受けることで、市民がわがまちを見直

す機会ともなっています。



バックヤードツアーの様子

4. 課題と展望

厳寒での作業が多く、スタッフは体力を消耗させます。特に日中から参加するスタッフには高齢者が多く、その傾向は著しいようです。また、悪天候の際には必要な人数を確保できない場合もあります。そのため、できるだけ多くの若いスタッフを安定的に集めることが課題の一つとなっています。

また、厳しい経済状況を反映し、必要な事業費の財源確保が極めて難しくなっています。回ごとに事業規模が大きくなり、支出の超過傾向が続いています。このままではイベント継続も困難になる恐れがあるため、選択と集中により、魅力を損なわない範囲での事業規模について、模索しているところです。

13回目を数えますが、やはり認知度では「さっぽろ雪まつり」に及びません。「小樽雪あかりの路」だけでは、客を集められない」という旅行代理店の声もあります。そのため、今後は、積極的なPRに努めるとともに、北海道全域における「冬の風物詩」に成長するよう、他の市町村とも交流を図りながら、広域的なイベント開催の働き掛けも必要だと考えています。その中で小樽が「雪あかりの故郷」というポジションを確立することが、小樽観光と「小樽雪あかりの路」の相対的な付加価値を高めることになると思います。

まず、「雪あかりの会場は市内全域であり、自分の家の前が本会場である」という意識を市民に持ってもらうことが最大の課題です。今後も雪あかりを楽しむための働き掛けを行いながら、実行委員一同、「小樽雪あかりの路」の広がりにも努めていきます。